

救済の原風景 #2

深野治



「太郎のトランプ」 油彩・キャンバス 1450x1120mm 1968

2

寺田健一郎は二科展出品から、故・伊藤研之を師としてスタートした。

伊藤研之は、リリシズムの画家であった。知性的な抑制によって静な情感を奏でる画風は都会の中の自然派の趣があった。

伊藤研之の個展の印象を、私はかつて次のように記した。

伊藤研之の魅力を一口にいえば、叙情と知性の融合である。

個展の印象だが いろいろ考えさせられたのが、「小舎」を描いた作品群である。山のキャンプ場のバンガローのような小舎をたくさん描いている。「空地の小舎」「気球と小舎」など。大きい作品、小さい作品。

この「小舎」で、伊藤さんは叙情味を静かに、しかも強く拒絶しているかに見える。拒絶が言い過ぎなら、沈潜させていると言ってもいい。

まったく人けのない、冷えた空気がバンガローを包んでいる。

色の配合は実に巧妙だ。黄、緑、赤それぞれの屋根が計算された距離をおいて点在している。その上に広がる空は灰色がかった青色で、重く冷たい。

知的な叙情でファンの心をとらえてきた画家が、最近の仕事で「沈黙」の世界に踏み込んでいるのはなぜだろうか。

一見おだやかな郊外風景を描いているようでいて、内容は深い海底にも似て静かで冷たい。

(1974年、フクニチ新聞)

伊藤研之の晩年の個展では最も規模の大きいもので、彼の達成の高さが示された展観であった。

この伊藤に寺田健一郎は終生私淑していたが、ことに初期作品に影響がいちじるしい。

技法上もさることながら、表現の奥にひそむべき感性の洗練において。

伊藤も寺田も同じ福岡市内の生まれ育ちであるけれども、伊藤はいわゆる福岡人、寺田は博多っ子である。福岡人は福岡藩士の子孫として武家の抑制された感情や行動を重んじる。洒脱で開放的な町人文化の血を継ぐ博多っ子の寺田健一郎が、その青春期にあつて伊藤研之に学んだものは、感性における抑制と統御であった。

23年間に及ぶ寺田との交友で私がしばしば痛感させられた彼の生活感覚にそれは現われていた。

「恥しうて、おれはしきらん」

目尻を下げて笑いながら、彼はおおげさな身ぶりや直截なものいいを柔くかわした。

この感覚が寺田健一郎の初期作品、叙情時代の画風をささえている。

彼が後半生20年間を過ごしたアトリエに、二科初入選の「牧場の少女」を掲げていたのは、単に追憶のためではけしてなかった。あるいは無意識裡だったかもしれないが、感性の所在を定める決定的な位置を体得した青春期を、忘れてならぬ初心として座右においたのである。

のちに激しい内心の葛藤のすえ、彼は二科会を脱退する。が、その寺田が必ず「先生」の敬称をつけて呼んだのは二科会の先輩、伊藤研之ただひとりであった。